

久保田淳編

『吉田兼右筆十三代集 続千載和歌集』

今でこそ「徒然草」の作者ということで、少なくとも名前だけは小学生にも知られているに違いない兼好法師は、生きている間はむしろ歌人として著名であった。彼は歌道家の宗匠二条為世（藤原定家の曾孫）の門弟で、為世の四天王の一人に数えられていた。四天王の他の三人は頼阿・慶運・浄弁である。年長だったらしい浄弁を除く三人の内では兼好は歌人としてはやや劣るといのが、後普光園院関白二条良基の見方である。

しかし、そもそも兼好の時代では、何を基準にして、歌人であるかないかを認定するのであろうか。それだけが唯一の基準というわけではないが、たとえ一首でも勅撰和歌集に歌が採られたということが、歌人であることの証明書のように考えられていたことは確かであろう。

『続千載和歌集』は、兼好の作品が初めて見出される勅撰集である。その作品は、

題しらす

兼好法師

いかにしてなくさむ物そうき世をもそむかて過す人にと
は、や
(雑下・二〇〇四)

という一首に過ぎないが……。

兼好だけではない。頼阿も浄弁も一首ずつ選ばれている。

題しらす

頼阿法師

つもれたゝにし山の嶺の雪うき世にかへる道もなきまで

(雑中・一八〇四)

離山の後寄杣述懐をよめる 権律師浄弁

なにと又わかたつそま木年をへてすみみぬ山に心ひくらん

(雑中・一八三二)

浄弁の子慶運はまだ年が若かったためか、この集には登場しない。彼の作品が最初に見出される勅撰集は、この『続千載和歌集』の次の次、「風雅和歌集」である。

『続千載和歌集』は第十五番目の勅撰集である。後宇多法皇の院宣によって二条為世を撰者として、後醍醐天皇の元応二年（一二三二）秋に奏覧された。全二〇巻から成り、二一四三首を収める。本書は宮内庁書陵部蔵吉田兼右本十三代集のうちの『続千載和歌集』（天文十九年〔一五五〇〕の書写校訂本、本集の場合は書写者は彦部晴直で、兼右は校訂者）を写真版によって収め、「新編国歌大観」の番号を付し、解説を掲げ、初句索引と作者索引を付したものである。兼右本は『新編国歌大観』の底本とされた本であるが、底本の原状を知ろうとすると活字の翻刻には当然限界がある。しかもこの集にも存する諸本間の異同の意味を考え、さらに集全体を精読する際には、写本の原状を知ることが必須の課題となる。その意味からも、この影印本の刊行は中世和歌の研究に基礎的な資料を提供したことになるであろう。

(平成九年四月一三日刊 菊判 六〇六ページ 笠間書院)